佳作

捧げる饗宴

トドロキ

【シナリオ概要】
このシナリオは、現代日本を舞台としており、探索者は 20 代から 30 代の若い男女である。いわゆる合コンと呼ばれる会食の席に集まった探索者は、神話的な要素を持った NPC と出会う。一人は片桐エミリという女性で、彼女は土産物として購入したチャウグナー・フォーンの石像から、神格の支配を受けている。もう一人は宮下慎吾という男性で、彼はわずかではあるがチョー＝チョー人の血を引いている。チョー＝チョー人の遺伝子によって、慎吾はエミリに異様な執着を見せ始める。はじめは単なる色恋沙汰のもつれかと思われたが、調査の過程で事の異常性が明らかになり、さらには、探索者までもがチャウグナー・フォーンの影響によって正気を蝕まれることとなる。チャウグナー・フォーンの石像を発見し破壊することで、NPC は正気を取り戻し、探索者も恐怖から解放される。

舞台は現代日本。探索者は、共通の知人に声をかけられ、合コンに参加する。楽しいひと時は一変、ある事件を皮切りに、探索者の周囲で異変が起き始める。探索者は、邪悪な存在と対峙することになるだろう。

1. はじめに

このシナリオは“新クトゥルフ神話 TRPG ルールブック（以下“ルールブック”）”に対応し、探索者 2 ～ 4 人向けにデザインされている。プレイ時間は探索者の作成時間を含まずに、3 ～ 4 時間程度だろう。

舞台は現代の日本。探索者は共通の友人である金森涼に誘われ、合コンに参加する。探索者の職業に制限はないが、年齢は 20 代から 30 代である。涼は、知り合いの伝手で居酒屋チェーン店を安く予約できたからと、探索者たちを合コンに誘った。異性との出会いを求めてか、あるいは安く酒を飲むため、探索者は会場である居酒屋に赴くことになる。

このシナリオは、時間の経過や NPC の行動よってイベントが発生することがある。キーパーは事前にこのことを伝え、プレイヤーが次の行動に迷うことがあれば、イベントを発生させて物語を展開させるとよい。

2. キーパー向け情報

探索者と同じく、涼に誘われて合コンに参加した片桐エミリは、旅行が趣味の女性である。シナリオ開始 2 週間前、上海を訪れていた彼女は、人気のない通りの露店で奇妙な石像を見つける。像がもつ尋常ならざる雰囲気に引かれた彼女は、土産として像を購入した。この像こそが、チベットのツァン高原から持ち出され、中国まで流れついたチャウグナー・フォーンの石像だったのだ。チャウグナー・フォーンは現世に降臨するために、エミリを支配し操り始めた。まずはエミリの食欲を高め、血肉となる食料をたくさん食べさせる。こうして、大量の血をエミリから補給し力を蓄えた。さらに、より多くの血を集めるために、夜な夜なエミリに人を襲わせ血を吸わせた。こうして、エミリ自身はその変容に無自覚なまま、神格の奴隷として奉仕させられるようになってしまった。その後、合コンに参加したエミリの目を通して、自身の食料にふさわしい若い男女、すなわち探索者を発見する。チャウグナー・フォーンは、探索者を生贄にこの世に顕現することをもくろむ。

一方、合コンの男性側の参加者に、宮下慎吾という人物がいる。彼は、反社会的な組織に所属する親族との縁を切るため、故郷を離れて一人暮らしをしていた。その暴力団とは、チョー＝チョー人やその血を引く者で構成された山蓮界というカルトだった。彼自身は知らないが、彼の体にもわずかにチョー＝チョー人の血が流れている。チョー＝チョー人はチャウグナー・フォーンを崇拝する種族である。信仰のために自身の血や肉を捧げることもあり、その血を引く人間は、無意識の

うちにチャウグナー・フォーンに対して親愛と畏敬の感情を抱いてしまう。合コンに参加した慎吾は、エミリからチャウグナー・フォーンの存在を感じ取り、彼女に対し異常な執着を抱き始める。こうした偶然の出会いが、探索者を巻き込む事件へと発展していくことになる。

3. 主なNPC

片桐エミリ（26歳）／無自覚な奉仕者

かわいらしい顔立ちで愛嬌のある、魅力的な女性である。大手企業の受付で働いている一方、実業家である父からの仕送りもあって、経済的に豊かな暮らしを送っている。涼とは、父の仕事の関係で知り合った。上海で購入したチャウグナー・フォーンの石像の影響で、邪神に奉仕させられている。

容姿の描写：大きな目と軽く巻いたロングヘアがかわいらしい印象で、スタイルもいい。あか抜けた服装で、身に着けているアクセサリーは、よく見るとブランドものである。

ロールプレイの糸口：多くの男性にとって、非常に魅力的にな容姿と性格をしている。また、男女問わず分け隔てなく接するため、同性の人物からも好印象を持たれる。かわいらしい声で話すが、どちらかというと聞き上手で、探索者の発言に対し、積極的に相槌を打ったり、質問をしたりする。

STR 45　CON 65　SIZ 45　DEX 80　INT 65
APP 90　POW 50　EDU 70　正気度 40　耐久力 11
DB：＋0　ビルド：0　移動：8　MP：10
近接戦闘（格闘）25％（12／5）、ダメージ 1D3＋DB
回避　40％（20／8）
技能：芸術／製作（料理）80％、信用　75％、心理学　50％、ほかの言語（英語）50％、魅惑　99％
呪文：チャウグナー・フォーンに完全に支配された時、《神格との接触（チャウグナー・フォーン）》を使う。また、チャウグナー・フォーンからの祝福により、《心臓をつかむ》を使うことができる。1ラウンドかけて10マジック・ポイントのコストを支払い、触れた相手に［1D10＋1］ポイントのダメージを与える。対象はCONロールに成功すると、ダメージを2分の1にすることができる。

宮下慎吾（25歳）／チョー＝チョー人の遠縁

北海道出身。国立大学の医学部を卒業し、現在は研修医としてM市にある大学病院に勤めている。涼は、同じ大学の先輩にあたる。親類とのつながりを疎ましく感じたため、地元を離れ本州で暮らすようになった。実家とは現在疎遠である。チョー＝チョー人の遺伝子をわずかに受け継いでおり、合コンで初めて出会ったエミリから、チャウグナー・フォーンの気配を無意識に感じ取ってしまう。彼は彼自身にも説明できない奇妙な情動に動かされ、異常な行為に及ぶようになる。

ロールプレイの糸口：普段は内向的な性格で、口数は少ない。しかし、エミリに出会った翌日から、彼女に対して病的な執着を見せるようになる。

STR 40　CON 50　SIZ 80　DEX 70　INT 65
APP 50　POW 50　EDU 80　正気度 30　耐久力 13
DB：＋0　ビルド：0　移動：7　MP：10
近接戦闘（格闘）60％（30／12）、ダメージ 1D3＋DB、またはドスによる1D4＋DB
回避　35％（17／7）
技能：医学　70％、運転（オートバイ）50％、信用　50％、ほかの言語（英語）20％

金森涼（27歳）／気さくな友人

出版社に勤める編集者で、探索者の共通の友人である。気さくな性格で広い交友関係を持つほか、毎年知人に年賀状を送るなどまめな一面もある。魅力的な友人たちを紹介したいという思いで、今回の合コンを企画した。キーパーは、探索者を含めた合コン参加者の男女比がなるべく1対1になるように、涼の性別を任意に決定する。シナリオ本文における涼のセリフは、涼が女性である場合を想定して記述しているが、セッションごとの性別によって、涼のセリフやロールプレイを自由に演出してかまわない。

涼は、都市伝説やうわさ話といったオカルトへ強い興味を持っており、最近では近所でうわさされる「怪物」の存在に好奇心を抱いている。

ロールプレイの糸口：明るく、社交的な性格。合コンの席では、探索者全員に積極的に話しかける。リアクションが大きく、常に相手を楽しませようとする。

STR 50　CON 65　SIZ 50　DEX 50　INT 80
APP 65　POW 80　EDU 70　正気度 67　耐久力 11
DB：＋0　ビルド：0　移動：8　MP：16
近接戦闘（格闘）66％（33／13）、ダメージ 1D3＋DB
回避　25％（12／5）
技能：運転（自動車）30％、オカルト　80％、隠密　50％、信用　37％、図書館　80％、母国語　85％、魅惑　50％、目星　65％

探索者を含めた合コン参加者の男女比が大きく偏る場合、キーパーは必要に応じてNPCを追加してかまわない。導入のシーン以外で登場する機会はないため、凝った設定は必要ない。キーパーがプレイしたことのある探索者の中から適当なキャラクターを選んでシーンに加えてもよい。

4. シナリオの導入

季節は秋。3連休前日の金曜日の夕方、探索者たちはM市のN山駅前にある、雑居ビル7階の居酒屋チェーン店に集まっている。テーブルには探索者と涼のほかに、20代の男女2人が座っている。涼は参加者に何を飲むか聞き、店員に飲み物と料理を注文する。全員分の飲み物が揃うと、涼は自身のビールジョッキを片手に音頭を取る。

「今日は集まってくれてありがとう！ みんなで楽しみましょう、乾杯！」

乾杯のあとは、涼が先陣を切って自己紹介を始める。以下は涼の発言の例だが、キーパーは自由にロールプレイをしてかまわない。

「じゃあ、まずは自己紹介。みんな知ってると思うけど、私は金森涼でーす。こう見えて、編集の仕事してます。普段は忙しくてなかなか機会がないから、みんなと飲めるのすごく楽しみにしてました！　オカルトの話を集めるのが趣味だから、そういうのが好きな人はぜひ語り合いましょう！」

自身の紹介が終わると、涼は探索者にも自己紹介を促す。探索者の自己紹介が終わると、涼以外のNPCも自己紹介をする。

「私は片桐エミリって言います。趣味は、旅行、かなあ。最近は上海に行きました。よろしくお願いします」

「……宮下慎吾です。地元は北海道、です。今は大学病院にいます。よろしくお願いします」

自己紹介後は、楽しい飲み会の席を演出できるよう、キーパーは涼やエミリから探索者へさまざまな話題を提供しよう。探索者が自己紹介の時に話した内容についてNPCから質問したり、感想を述べたりするとよい。事前に探索者のバックストーリーに目を通し、エントリーに関わるような話題を挙げるのもいいだろう。

趣味の話題になると、エミリは先日訪れた上海旅行のことについて語り、SNSに投稿した旅行写真を探索者に見せる。ただし、旅行で見つけた石像の話はしない。勘のいいプレイヤーは、「奇妙な像」という物品に不信感や警戒心を覚えるだろう。キーパーはこのシーンにおいて、プレイヤーがエミリに対しあくまで好印象を抱けるような演出を行なうこと。合コンの最中、探索者は次の光景を目撃する。

エミリの様子

エミリは積極的に会話に参加する一方、よく飲みよく食べていることがわる。早いペースで酒を飲んでいるが、あまり酔っている様子はない。また、小柄な体格でありながら、出てくる食事をたくさん食べ、自分でもよく注文をしている。このことについてエミリに話を聞くと、「最近、やたらとお腹がすくんですよね。食欲の秋だからかなあ」と答える。彼女はそうとは知らないが、血肉を十分に蓄えさせるため、チャウグナー・フォーンが彼女に過剰な食欲を与えているのだ。

慎吾の様子

自分から積極的に話しかける様子はない。しかし、探索者が注意を払ってみると、頻繁にエミリを見つめていることがわかる。はた目には一目ぼれでもしたように思えるが、〈心理学〉に成功すると、ほれているというよりは何かに気を取られているようである。これについて慎吾に尋ねる場合、適切な対人関係技能に成功すると、「……初めて会った気がしないというか、ずっと会いたかったような気がして……」と、奇妙な思いをひそひそと打ち明ける。

涼の話題

酒が進むと、涼はいっそう陽気になる。そして、キーパーが適切だと思うタイミングで、「そういえば、最近この辺りでうわさになってる『怪物』の話、知ってる？」と探索者に尋ねる。〈オカルト〉に成功するとうわさの内容を知っている。先週から、N山駅近辺で夜間に人が襲われる事件が数件発生しており、被害者はそれぞれ「血を吸われた」と証言しているというものだ。しかし、何に襲われたのか、被害者はまったく覚えていないという。うわさのことを涼に質問した場合も、同様の内容を説明する。涼は身近な場所で起こる怪奇事件に、不謹慎とは知りつつ好奇心を隠せない様子を見せる。

襲撃事件

参加者たちが食事を楽しんでいると、やがて飲み放題の制限時間が迫り、合コンはお開きとなる。キーパーとプレイヤーが望めば、2軒目に河岸（かし）を変えてもかまわないが、いずれにせよ夜の間に解散することになる。参加者たちが店の前で解散したのち、キーパーが適当だと思う探索者のもとに、涼から電話がかかってくる。涼は「おつかれ」と声をかけ、参加してくれたことへの礼と、楽しかったという感想を伝える。しばらくたわいない会話をしていると、そろそろ家につくと言って、涼が電話を終えようとする。

その時、唐突に涼が悲鳴を上げる。直後、スマートフォンが地面にたたきつけられる音と、何かが争うような音が聞こえてくる。探索者が呼び掛けても涼は答えず、ただ、恐怖に引きつった声で「やめて！」と叫ぶのが聞こえる。友人が何者かに襲われるのを

電話越しに聞いた探索者は、0／1正気度ポイントを失う。〈聞き耳〉に成功すると、涼の悲鳴のほかに、人間のうなり声が聞こえることがわかる。次第に涼の声は小さくなっていき、やがて何も聞こえなくなる。

探索者が涼のもとへ向かう場合、涼の自宅付近に当たりをつけて向かうことができる。大きな公園沿いの道に差し掛かると、回転灯をともしたパトカーと、現場保存に動く警官を目にする。警官に事情を聞くと、意識を失って倒れている涼を通行人が発見し、警察と救急に通報したことがわかる。涼は病院に搬送されたが、命に別状はない。探索者が涼の知人であることを話すと、警官は探索者にその夜の状況を聞き取りする。

警官から事件について詳しく尋ねる場合、適切な対人関係技能に成功すると以下の事実を聞き出すことができる。

・8日前から、近隣で類似する事件が4件発生しており、今回が5件目である。
・被害者は全員首元に、人間のものと思われる噛み痕がついていた。現場にはさほど血痕は残されていなかったが、被害者はかなり失血している様子だった。
・噛み痕以外には十分な手掛りが得られず、DNA鑑定など有用な検査が可能なだけの遺留物は残されていない。また、被害者は自分を襲ったものの姿をまったく覚えておらず、捜査は行き詰っている。

事情聴取が終わると、探索者は解放され、帰宅することになる。

奇妙な夢

合コンに参加した探索者はその夜奇妙な夢をみる。

探索者が立っているのは、煮え立つ大地と沸騰する海が広がる高温の星。見上げると、燃え上がる流星が、尾を引いていくつも降ってくる。落ちているのは、巨大な体躯（たいく）の有翼生物で、頭部からは頭足類のような触手を生やした怪物だった。その生き物が、黒々とした粘液に向かって落ちていったかと思うと、粘液の一部が激しく隆起し、その怪物を一息にのみ込んだ。熱せられた地上に降り立つおびただしい数の怪物を、粘液は際限なくむさぼり食らっている。この光景を目撃した探索者は、1／1D4正気度ポイントを失う。

探索者は夢を見たあとにPOWロールを行なう。これに失敗した探索者は、チャウグナー・フォーンから精神を介したお告げを受ける。おぞましくも強大な神の存在を感じ取った探索者は、以降チャウグナー・フォーンの像が破壊されるまで、毎日この神格の幻覚に悩まされることになる。キーパーは、どの探索者がPOWロールに失敗したかを覚えておく。以後、この探索者を「お告げを受けた探索者」と呼称する。

5. 合コンの翌日

翌日、テレビやインターネットの地方ニュースで、N山駅近くの市民公園で夜間に通行人が襲われた事件が報道されている。

探索者が望めば、病院に搬送された涼に面会することも可能である。涼の容態は安定しており、朝になると意識を取り戻す。涼に昨夜の状況について尋ねると、背後から何かに襲われ、首筋から血を吸われたと話す。しかし、それ以外のことはまったく思い出せないでいる。〈医学〉や〈精神分析〉に成功すると、脳震盪や心因性の健忘とは様子が異なっているという違和感を覚える。被害者は、チャウグナー・フォーンの魔術的な作用で記憶を奪われているのだ。なお、昨晩見た夢のことについて尋ねると、涼は覚えがないと答える。涼はしばらく安静が必要だが、翌日には退院することができる。

奇妙な幻影

合コン翌日の土曜日、探索者は予定どおりの1日を過ごすことができる。しかしお告げを受けた探索者は、唐突に奇妙な幻影を目撃する。

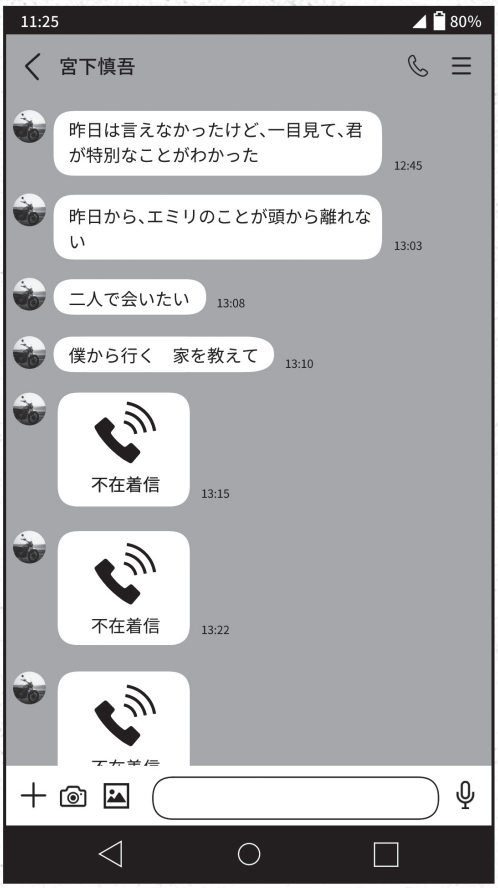
お告げを受けた探索者は、ふとした拍子に、鏡やガラス、水面などに映った鏡像から、「視られている」という悪寒を覚える。思わずそちらに目を向けると、反射した面に、グロテスクな生き物が映っている。幾重にも重なる脂肪を蓄え、顔から伸びる長い触手は象の鼻のようにも見えるが、不ぞろいな耳や牙は生理的な嫌悪感を催す。それは探索者を品定めするように見つめていた。奇妙な幻影を見た探索者は1／1D6正気度ポイントを失う。幻覚は一瞬のうちに消える。

お告げを受けた探索者は、像が破壊されるまで毎日1回この幻影を目撃することになる。キーパーは翌日以降も、探索者がロールに失敗した時やそのほか効果的だと思われるタイミングで、同様のイベントを起こすこと。

6. エミリからの相談

合コン翌々日の昼ごろ、探索者はそれぞれSNSを通じて、エミリからメッセージを受け取る。最初に届いたのは、メッセージアプリの画面を撮影したスクリーンショット画像で、慎吾がエミリに対して一方的なメッセージを何度も送りつけている様子がわかる（プレイヤー資料「慎吾からのメッセージ」）。この画像のあとに、エミリ自身がメッセージを送信する。

“昨日から、ずっとこんな感じで送られてくる”
“怖い”
“慎吾君と話して、止めてもらえないかな……”
探索者から返信したり、電話をかけたりすると、彼女はひどくおびえていることがわかる。エミリは、メッセージを送るのをやめるよう、直接慎吾を説得してくれないかと探索者に依頼する。



(捧げる饗宴 プレイヤー資料「慎吾からのメッセージ」)

慎吾の自宅

探索者から慎吾に連絡を取ろうとしても、電話はつながらず、SNSの呼びかけにも反応がない。慎吾との接触を試みるのであれば、彼の自宅を訪れるのが手っ取り早い。涼が慎吾の自宅を知っているため、涼から慎吾の住所を聞き出すことができる。

教えられた住所は、N山駅の隣の駅近くにある、かなり年季の入った3階建てのアパートである。インターフォンを押しても反応はなく、玄関には鍵がかかっている。〈鍵開け〉に成功すれば鍵を壊さずに開けることができるほか、〈機械修理〉やハードのSTRロールによっても無理やりドアを開けられる。また、101号室に住んでいる大家を訪ねれば、適切な対人関係技能によって鍵を借りることができる。

中に入ると、部屋は単身者用の間取りで、人の気配はないことがわかる。玄関から続く廊下の先のドアを開けると、中は10畳程度のワンルームで、右手にはキッチン、左手にはベッドとサイドテーブルが置かれている。そして部屋の中央に置かれた机の上には、大量の紙が散らばっている。

机

N山駅を中心とした大判の地図と、プリントアウトされた写真が数十枚広げられている。写真は街の風景や、店で購入したと思われる商品などを撮影したとりとめもないものである。〈心理学〉に成功すると、若い女性が好んで撮影しそうなものだと感じる。エミリのSNSを見たことのある探索者は、これらの写真がエミリが投稿したものだということがわかる。また、写真には番号が振られており、机に広げられた地図にも対応する数字が書き込まれている。INTロールに成功すると、こうした地図への書き込みが、写真撮影者の行動圏を調べるためのものであることがわかる。INTロールの結果がハード以上なら、自宅ベランダから撮影されたと思われる写真を発見し、その風景から、駅に近いマンションの5階ほどの高さから撮影されたものではないかと当たりをつけることができる。この写真にはまだ番号が振られていないため、自宅の特定にはいたっていないことがわかる。

探索者がエミリのSNSを確認するのであれば、エミリはいわゆる「自撮り」と呼ばれる自身を撮影した写真も多く投稿している。しかし、プリントアウトされた写真の中にはそうしたものはない。慎吾はあくまで、エミリの背後にいるチャウグナー・フォーンに引かれているのであり、被写体としてのエミリは必要ないのだ。

ベッドサイドテーブル

1冊の手帳が置かれ、中を開くと日記であることがわかる。1日1日の記述は短いが、数年分つづられているため、すべてに目を通すのには時間がかかる。直近の日記には、以下のことが描かれている。

一昨日：
今日、金森さんに誘われて合同コンパに参加した。ああいう場所はやっぱり苦手だ。でも、片桐エミリという人は、なぜか初めて会った気がしない。ひどく懐かしく（何かを書いて上からペンで消している）

昨日：
どうしてもエミリに会いたい。メッセージは返信がない。どうしたら会える。
（以下、最後の記述は震える筆跡で書かれている）
どうして　エミリにどうしてもささげたくて　やってしまった　これを　なんとかしてとどけたい

〈目星〉に成功すると、ペンで消した部分には「この身を捧げたくなる」と書かれていたことがわかる。また〈日本語〉に成功すると、流し読みした日記の中から、気になる記述を見つけることができる。

7年前の日付：
ようやく北海道を出られる。わずらわしい親戚との関わりがなくなってほっとする。妙な像を拝んでいるし、血の気が多い。やっぱりカルトか、暴力団関係者なのだろうか。

キッチン
整頓されているが、まな板が出しっぱなしになっている。まな板には輪ゴムが置かれていて、乾きかけた血が付着している。慎吾は昨日、チャウグナー・フォーンに対して湧きおこる信仰心のために、自分の小指をここで切断している。輪ゴムを強く指に巻き付けることであらかじめ血を止め、所有していたドスによって指を切り落としたのだ。

慎吾の自宅の状況を踏まえ、エミリに注意を促すのであれば、彼女は慎吾がストーカーまがいの行為をやめるまで、自宅を離れると告げる。探索者がエミリの警護を申し出る場合、エミリは感謝してそれを受け入れる。

エミリの自宅
エミリや涼から、エミリの自宅住所を聞くことができる。彼女はN山駅にほど近い、10階建てマンションの501号室に住んでいる。マンションは、洗練された外観をした築浅の10階建てで、共有玄関はオートロックである。近隣住民に聞き込みをすると、慎吾を見たという人はおらず、彼はエミリの住所まではつかめていないことがわかる。

大学病院
合コンの時の慎吾の発言を手掛りに、彼を探して大学病院を訪れることができる。M市にある大学病院は、涼が搬送された病院でもある。受付などで職員に尋ねると、慎吾は不在であるという。適切な対人関係技能に成功すると、次のことがわかる。

・慎吾は研修医である。今日は出勤予定だったが無断欠勤している。
・口数が少ない人物で、周囲に彼のことをよく知る人物はいない。

探索者が病院で聞き取りをしていると、検査を終えて退院した涼が受付にやってくる。涼は探索者に何かあったのかと尋ね、慎吾がストカーまがいの行為に及んでいることを知ると、自分も捜索に協力することを申し出る。

探索者が涼と合流したのち、涼のもとに電話がかかってくる。発信者は慎吾で、涼や探索者に対してエミリの自宅住所を教えてほしいと迫る。涼や探索者の問いに対して、慎吾は次のように答える。

・慎吾は、エミリに対し強く焦がれている。しかし、なぜそれほど執着するのかといった問いには、「エミリは、特別な存在なんだ、それがわかるんだ」と、支離滅裂なことを答える。
・探索者が彼の居場所を尋ねたり、会って話したいなどと伝えると、「そんなことどうでもいい」と返し、探索者に会うことを避ける。
・慎吾はあくまで、エミリと一対一で会うことを望む。そのため、探索者同席の上でエミリと会わせるといった提案は断る。

7. エミリのお願い

探索者が退院後の涼と合流し、必要な調査や相談などを終えると、エミリは探索者にお願いごとをする。このような状況では、自宅で一人過ごすのが怖く、今晩は涼を含む全員と一緒に別の場所で過ごしたいというものだ。エミリが探索者に同行していない場合でも、エミリから探索者へ状況を確認する連絡が入り、同様のお願いごとをする。この依頼に応じると、近場ということもあり、涼が自分の家を宿として提供する。

涼は、3階建てアパートに住んでおり、家の中は日ごろの多忙さを思わせるようなやや雑然とした様子である。涼は、散らかった衣服などをどけて、客人のスペースをつくる。エミリは、無理なお願いをしたことを謝りつつ、片付けなどを進んで手伝う。また、せめてものお礼にと、夕食を作ることを申し出る。エミリは、涼の家のキッチンを借りて、てきぱきと夕食の準備を進めていく。この間、キーパーは、探索者とエミリが交流を深められるような演出をするとよい。エミリが作る料理は、家庭的なレシピから、珍しい香草を使ったエスニック料理まで幅広く、そのどれもがおいしく出来上がっている。

不気味な贈り物
探索者が涼の家で団らんしていると、インターフォンが鳴らされる。宅配が届いたようで、涼が荷物を受け取りに玄関へ向かう。居間に戻ってきた涼は神妙な表情をしており、冷蔵用の白い小包に貼られた送り状を探索者に見せる。送り主は、宮下慎吾と書かれている。箱を開けると、クッション材を敷き詰めた中に、カードと手のひらほどのギフトボックスが収められている。カードには、「エミリの家がわからなかったから、僕に代わってこれをエミリに渡してほしい」と書かれている。

ギフトボックスの中身を確認すると、そこには血の気がなくなって青白くしなびた、人間の小指が入れられている。小指は、第二関節から切断された男性のもので、〈医学〉に成功すると、1、2日前に、鋭い刃物を使って切断されたことがわかる。このおぞましい贈り物を目撃した探索者は、0／1D3正気度ポイントを失う。

涼は思わぬ贈り物に恐怖し、エミリは呆然としている。ただし、慎吾が涼の自宅に訪れるようなことはなく、そのまま夜は更けていく。やがて、おのおの不安を感じながらも、眠りにつくことになるだろう。この時、探索者が就寝した時点での正気度を現在正気度とすること。

吸血の悪夢

この日の夜、お告げを受けた探索者とエミリは、チャウグナー・フォーンの影響により、意識のないまま吸血行為におよんでしまう。キーパーは、涼とお告げを受けていない探索者の中から、エミリの吸血の対象をダイス・ロールで決定する。同様に、お告げを受けた探索者も対象を決定する。探索者が全員お告げを受けている場合は、全員が涼に襲いかかることになる。

吸血の対象となった探索者は、〈聞き耳〉に成功すると、肩をつかまれる感覚に目を覚ます。すると目の前には、獣じみた形相で目を血走らせながら、今にも首筋に牙を立てようとしている知人がいる。噛みつかれる前に目を覚ました探索者は、〈回避〉や〈近接戦闘（格闘）〉によるマヌーバー、その他適当なロールに成功することで、噛みつきをまぬがれることができる。ロールに失敗して噛みつかれた人物は、1D3ポイントの耐久力を失う。複数の人物が1人のキャラクターを対象にした場合、噛みつきを行なうのは最もDEXの高い一人とする。

対象が噛みつかれるのをまぬがれるか、あるいは噛みつかれてしまった後に声を上げることで、吸血行為に及んでいた人物は正気を取り戻す。友人に噛まれそうになった、あるいは友人を噛もうとしていた探索者は0／1D3正気度ポイントを失う。実際に噛まれてしまった場合は、1／1D3＋1正気度ポイントを失う。

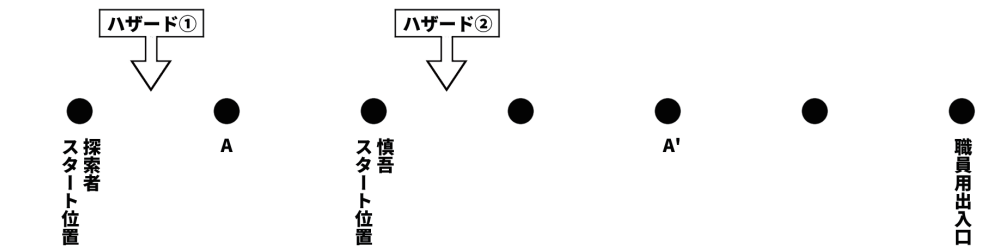
8. 大学病院へ

奇妙な出来事が起きた翌朝、涼はノイローゼ気味になっている。そして、昨夜の出来事が、街で起きている吸血事件と関連があるかもしれず、新しい精神疾患や寄生虫などの可能性も考えられるため、病院で検査を受けるべきだと主張する。エミリもそれに同意する。病院へ到着後、エミリや吸血行為におよんだ探索者は診察を受けることになるが、検査の結果、体には一切異常がないことがわかる。原因や明確な治療法が判明せず、涼やエミリは不安そうな様子を見せる。

探索者は、2階のフロアで検査を受けている。おのおのが検査を終える頃、ただならぬ声色で、「おい！　待て！」という叫び声が聞こえてくる。声の主は医師で、その視線の先にはスポーツバッグを肩から下げ、今にも走り去ろうとする慎吾がいる。

慎吾と探索者は速度ロールを行ない、チェイスが確定すると探索者は慎吾の後ろを追いかけることができる。慎吾を捕まえるための条件は、彼と同じポイントに到達した状態で1回の移動アクションを使うことである。キーパーは、チェイスを開始する前にこの条件をプレイヤーに伝えておくこと。速度ロールの結果、すべてのキャラクターが慎吾のMOVを下回ると、チェイスは発生しない。その場合、探索者は慎吾を追って走り出すものの引き離され見失ってしまう。チェイス開始時のスタート位置とハザードの位置は「捧げる饗宴チェイス表」を参照のこと。ハザードの内容は、探索者がその場所に差し掛かった時に判明する。

捧げる饗宴チェイス表



ハザード①：騒ぎを聞きつけて集まった職員や来院者による人だかり。〈回避〉に失敗すると人とぶつかって転倒してしまい、1D3 回の移動アクションを失う。

ハザード②：慎吾は折よく到着したエレベーターに飛び込み、探索者の目の前で扉が閉じてしまう。エレベーターは 1 階へ下りて行く。彼に追いつくためにはAの位置にある階段から 1 階のA'まで降りなければならない。〈跳躍〉に成功すると、A から A'まで 1 回の移動アクションでたどり着くことができる。失敗すると 1D3 回の移動アクションを失う。

慎吾は職員用出入口に到達すると次の移動アクションで外に飛び出し、停めてあるバイクに飛び乗って逃げ切ってしまう。慎吾が逃げ切るか、その前に探索者が慎吾を捕まえることができれば、チェイスは終了する。

慎吾の告白

探索者に捕まった慎吾は腕を振り払おうともがき、その拍子にスポーツバッグを落とす。ファスナーが空いたままのバッグから飛び出したのは、大量の輸血用の血液パックである。慎吾はそれらを指しながら「これをエミリに届けてくれないか⁉　そうすれば、僕のことを認めてくれるはずだ」と叫ぶ。探索者が問い詰めても、応答は支離滅裂である。やがて追い詰められた慎吾は、「これじゃあ足りないのか⁉　だったら———」と言い、懐から木の筒を取り出す。両手でそれを引き抜くと、白光りする刃が現れ、それがドスと呼ばれる短刀であることがわかる。彼は手にした凶器を振りかざし、自らの腕に躊躇なく突き立てる。刃は肘の内側を深々と切り裂き、飛び散った血が探索者にも降りかかる。彼の顔は大きくゆがみ、人間離れした表情と化していた。狂気じみた光景を目撃した探索者は、1 ／ 1D3 正気度ポイントを失う。慎吾は、あたかも自身の腕を切断しようとするかのように、何度も刃を突き刺す。彼を止めるためには探索者が押さえ込むしかない。やがて、興奮と失血により、慎吾は意識を失う。その後駆け付けた警察によって、慎吾は警察病院に搬送される。

エミリの失踪

突然姿を現した慎吾に気を取られていた探索者は、騒ぎが収まった後、エミリと涼の姿が見当たらないことに気がつく。電話やメールでも連絡がつかず、病院内を探すと、入口付近に涼のスマートフォンが落ちているのを見つける。スマートフォンは、探索者に電話をかけようとする画面が表示されたままで、発信はされていない。

この時、エミリと涼はエミリの自宅に向かっている。慎吾が姿を現すのと時を同じくして、完全にチャウグナー・フォーンに支配されてしまったエミリは、神から与えられた《催眠》の効果によって涼を従え、神をこの世に呼び出そうとしている（《催眠》の詳しい効果は“新クトゥルフ神話 TRPG マレウス・モンストロルム Vol.2 神格編”151 ページを参照。ただし、エミリは探索者に対して積極的に《催眠》を使うことはない）。

涼や慎吾の自宅にもエミリたちの姿はないため、考えられる行先はエミリの自宅となる。もし、探索者が行先を思いつかないようであれば、エミリから探索者に連絡が入ることにしてもよい。その場合、エミリは友好的な様子で、突然帰宅したことを謝りつつ、これまで協力してくれた探索者に礼をしたいと言い、自宅へ招待する。

9. 神に捧げる饗宴

エミリが住んでいるマンションの共有玄関はオートロックのため、訪問先の部屋番号を入力したのち、呼び出しボタンを押してインターフォンを鳴らす必要がある。探索者がエミリの部屋のインターフォンを鳴らしても応答はないが、代わりにガチャリと音を立ててオートロックが解錠される。

マンションの中に入ると、エントランス、エレベーターを経由して、エミリの自宅前にたどり着く。再度インターフォンを押すと、突然玄関のドアが開き、エミリが「いらっしゃい」と笑顔で探索者を出迎える。エミリは探索者の問いに対し、「今まで助けてくれたお礼がしたくて、こっそり準備してたの」とうれしそうに話しながら、探索者を家の中へ招き入れる。

エミリの自宅は、彼女の年にしてはかなり高級な物件である。中は 1LDK の広々とした造りで、夕暮れ時にもかかわらず明かりがついていないため薄暗い。そして探索者が通されたダイニングには、豪勢な食事と、火のともった燭台（しょくだい）が並べられた食卓が用意されている。エミリは探索者に席を勧めながら、恍惚とした表情で話し始める。

「みんな、今日は集まってくれてありがとう。おかげで最初の晩餐にふさわしい若い男女を集めることができた」

キーパーは、以下の文を読み上げる。

突然、エミリはいつもとはまったく違うしわがれた声でそう告げる。だらしのない笑みを浮かべ、目からは理性の光が消えている。直後、エミリはまったく聞きなじみのない音声を朗々と唱え始める。

その直後、ダイニングテーブルの真上に、奇妙な幻影が現れる。それは、高さ5mもの、醜悪な贅肉で膨れ上がった巨体だった。小さな頭部の両側には扇のようなひだが生え、顔の中央から伸びる触手の先端は、開いたりすぼんだりを繰り返す。顔の肉に埋まる黄色い眼球は、運ばれてきた食料を値踏みするように探索者を見下ろしていた。

今まさに顕現しようとするチャウグナー・フォーンの幻影を目撃した探索者は、1D3 ／ 1D10 正気度ポイントを失う。この時、狂気の発作に陥った探索者は、“ルールブック”157 ページの表「マニアの例」から「アイドルマニア（58）」を獲得する。同時に、目の前に投影された幻影と神の本体とを仲介する、依（よ）り代となるものがこの家のどこかに隠されていることを直感的に理解する（“ルールブック”165 ページ「狂気のひらめき」を参照）。

エミリの家には涼が潜んでおり、病院で慎吾を取り逃がしていた場合は、彼も隠れて探索者を待ち構えている。〈聞き耳〉に失敗した探索者は、死角から飛び出してきた慎吾と涼からの奇襲を受ける。慎吾はドスで攻撃を行ない、涼は戦闘マヌーバーで探索者を 1 人拘束しようとする。以降は、戦闘ラウンドとして処理をする。

チャウグナー・フォーンはエミリに《神格との接触》呪文を唱えさせ、自身を顕現させようとしている。キーパーははじめに 1D6 ＋ 4 をロールし、チャウグナー・フォーンの実体が現れるまでのラウンド数を決定する。探索者は、邪悪な神格が姿を現す前に、その企てを阻止しなくてはならない。そのためには、エミリに思念を送っている偶像を破壊する必要がある。探索者がいずれも狂気に陥らず、依り代の存在を知らなかったとしても、事態を食い止めるためには家の中から手掛りを見つけなければならないと理解する。チャウグナー・フォーンの偶像は、以下のいずれかの部屋に隠されている。

・リビングダイニング
・キッチン
・洋室
・ベランダ
・浴室、洗面所

キーパーはキャラクターが行動する前に、像が隠されている部屋をランダムに決定しておく。なお、探索者が少ない場合は、像を隠しうる部屋の数を減らしてもかまわない。それぞれの部屋をくまなく調べるためには 2 ラウンド必要だが、〈目星〉に成功すると 1 ラウンドで部屋を調べ切ることができる。像の隠された部屋を調べることに成功すれと、高さ 30cm ほどの石像を発見する。

石像は、ダイニングテーブルの上に浮かぶ幻影と同じ姿形をしており、牙の部分だけが水晶のような透き通った素材でできている。像は内側から粘液を分泌していて、所々緑色の液体をしたたらせている。このおぞましい像を目撃した探索者は 0 ／ 1D6 正気度ポイントを失う。石像を破壊するためには、石像の耐久力を 0 にする必要がある。石像の耐久力は 20 であり、素手で傷をつけることはできない。硬いもので殴打する場合は、道具に応じたダメージを与えることができる。石像を壁や床にたたきつける場合、STR ロールに成功すると、石像を持ち上げて 1D10 ポイントのダメージを与えることができる。また、エミリの自宅はマンションの 5 階に位置しており、バルコニーから石像を落とせば一息に粉々にすることができる。その場合、1 ラウンドかけて STR ロールに成功することで石像をバルコニーまで運び出し、次のラウンドで地面へ落とすことがきる。狂気の発作に陥っている探索者は、チャウグナー・フォーンの偶像を破壊するためのロールに、ペナルティー・ダイス 1 つを受け取る。

エミリの行動

この戦闘ラウンド中、エミリは呪文の詠唱に専念するため、探索者に対して攻撃や応戦、回避を行なわない。しかし、エミリに触れた場合、《心臓をつかむ》の呪文によって、触れた人物はダメージを受ける。呪文を止めるためにはエミリの耐久力を 0 にするか、戦闘マヌーバーによって口をふさぐ必要がある。エミリはチャウグナー・フォーンの支配下にあるため、耐久力が 0 にならないかぎり意識不明に陥ることはない。口をふさがれるなどして呪文が中断された場合、エミリは探索者に対して襲いかかってくる。この時、これまでの吸血によって蓄えたマジック・ポイントを絶えずチャウグナー・フォーンから供与されるため、エミリは《心臓をつかむ》を何度でもかけることができる。

慎吾の行動

慎吾はドスを使って探索者に切りかかり、像に近づいた人物を優先して攻撃する。また、戦闘マヌーバーで取り押さえられたり、追い詰められたりした場合は、自分の手番で《心臓をつかむ》を使って探索者を攻撃する。慎吾はマジック・ポイントと耐久

力をコストにすることで、最大で2回《心臓をつかむ》をかけることができる。

涼の行動

涼は、《催眠》によってチャウグナー・フォーンに操られている。探索者を傷つけることはしないが、像に最も近い探索者を、戦闘マヌーバーで取り押さえようとする。石像が破壊されると《催眠》の効果が消え、われに返る。

10. 結末

石像を破壊すると、現れかかっていたチャウグナー・フォーンは憎々しそうに探索者をにらみつける。しかし依り代を失った神はそれ以上人間に影響を及ぼすことはできず、やがてその幻影は闇に溶け込むように消えていく。危機は去ったが、探索者は邪神の恨みを買ってしまったと理解するだろう。

呪文を唱えていたエミリは意識を失って倒れる。しばらくすると目を覚ますが、自分が何をしていたのかは覚えておらず、悪夢を見たあとのような嫌な感覚に、冷や汗をかいている。

エミリを支配していたチャウグナー・フォーンの気配が消えたことで、慎吾もまた正気を取り戻す。慎吾の目に徐々に理性が戻り、そして自分がしたことを思い出しながら「どうして……あんなことを……」と打ちひしがれている。

涼だけはけろっとした様子で、置かれている状況に首をかしげながら、「何が起きたのかイマイチよくわからないんだけど、せっかくだからみんなで食べない？」と、食卓の料理を指さす。おぞましい儀式が行なわれ、正気を失った人間と一時奮闘していた探索者が、その提案に応じるかどうかは自由である。

石像を破壊することで、チャウグナー・フォーンの奴隷となっていたエミリは解放され、お告げを受けた探索者も幻覚や吸血行為に悩まされることはなくなる。かくして、人間を操り現れ出でようとする邪神の企てを阻止した探索者は、1D10 正気度ポイントを獲得する。エミリを死なせずに助けることができた場合、ボーナスとしてさらに＋1D3 正気度ポイントを獲得する。